隠人使い　２　呪われし者＜４＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隱人使い　２　呪われし者＜４＞

【Ｎコード】
Ｎ２５０７Ｏ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
果たして同級生の新谷を狙うのは、霊なのか、それとも・・・　・・・

参―1（前書き）

ぼちぼちです（＿＿）。。。

参―1

その黒い影は確かに新谷の家の2階から綾の元へ舞い降りて来た。
綾は目を細めた。
昨日の望との夕食後の出来ごとである。
影は、

ニャー

一言呟き、綾の胸元へと鋭い歯を付き立てようと飛び込んで来た。
「・・・　・・・・。」
綾は軽く身をかわし、振り返りざま五芒星が描かれた紙を中空に放った。
それらは、春の夜風に桜の葉と共に乗り、四散した。その姿が次々と黒いカラスへと変わったかと思うと、今度は人型へと変化した。
皆、頭上には2本の銀色の角を宿していた。
「隠人よ。」
綾は彼らに命令した。「その者を捕えよ。」

ザザザーッ

一斉に隠人の気配が動く。
その隙間を、

ニャー

黒い影が縫って綾の胸元を目指す。
彼は龍王の剣に手をかけた。
すっ・・・　・・・と、柄に銀色の龍の彫り物を施した鞘から刀

を抜きだす。
その瞬間、黒い影が中空で止まった。
「お前はこの世の者ではないな。」
眼前に剣をかざしたまま、綾がそう問いかける。「一体、お前の――お前らの『主』は誰だ。」
顰めた瞳が一層妖しく月光に輝く。

「昨日、そんな事があったの。」
新谷親子と別れた後、望は綾に言った。
「お前との夕食中、式神が来ただろ？それでそこへ行ったらどうやら相手は俺を待っていたらしい。」
夕闇が訪れる中、2人の影が足下に伸びる。
「それが猫だったんだ。」
望は目を丸くし、「じゃ、新谷君を苦しめているのは、やっぱり猫の霊か何か？」
小首を傾げる彼の姿を見つめ、
「いや。」
綾は答えた。「相手も式神だ。」
「はい？」
大きな瞳を見開き、望は思わず立ち止った。
「式神って・・・　・・・。綾以外にも操れる人が東京(ここ)にいるの？」
「いる。」
右手の親指を噛み、少し考えた様な仕草を見せた彼は、「恐らく・・・　・・・あいつだろう。」
ぽつり、と言った。

『土御門家は安倍晴明を祖とし、京(みやこ)を、その拠となる皇室を陰陽寮をもって守って来たもの。西の京(みやこ)には玄武・百虎・朱雀・青龍をもって、また東山には彼の和気清麻呂が死してなお、千数百年の時

をもって、京(みやこ)を鎮めている。元来、東にあった鴨川。それを京(みやこ)を守るためその中心に変えさせたのも和気清麻呂の力によるもの。しかし、京(みやこ)は後白河法皇や遡れば奈良の都、藤原四家、特に恵美押勝（藤原仲麻呂）の恨みを抱いたままその恨みの根源でもある皇室と共に東へと移されてしまった。京(みやこ)自体、言ってみれば悪霊の系譜そのものだと言ってもいい。東の京(みやこ)には、安倍の血を引く平将門がやはり数百年の恨みを抱いたまま闇の者を司っている。目に見えぬ戦は、むしろ西の京(みやこ)より東の京(みやこ)の方が重い。西の京(みやこ)の様に伝統や伝説に尊ぶ者も少ない。鎌倉時代より続いた皇室内の陰陽寮も明治には排除されている。己の心の中に潜む欲望が『彼ら』の糧となっている。綾。お前は父と供に2つの京(みやこ)を守護しなければならぬ。例え、どちらが先に死しても、死して尚、陰陽師として京(みやこ)を皇室を人々を守らなければならぬ。お前の父の相手が藤原家であるとしたら、綾、お前の相手は藤原家より『念』の強い、平将門だ。それを封じるのがお前の役目。』

綾の脳裏をあのナイト・メアとの夢の中での祖母の台詞がよぎった。

「どうしたんだ、綾。」

急に自分と同じ様に立ち止った綾の姿を見つめ、望は問いかけた。

「何かいいアイディアでも浮かんだの？」

「望。」

彼は振り返った。「お前、井上がこの地元に詳しいとか言ってたな。」

「ああ。生まれてからずっとだとか言っていたけど。」

「井上と連絡取れるか？今。」

「うん、いいけど・・・　・・・」

「俺もお前もまだここにきて1年だ。土地に関しても地理に関しても歴史に関してもそう詳しくはない。井上に手伝ってもらいたい事があるんだ。」

「わかった。」
望は頷き、制服の胸ポケットから青い携帯を取り出した。

るるる　るるる

「もしもし、井上？そう――今は飯田先輩は？」
「飯田先輩の事は放っておくように言ってくれ。」
『土御門君も一緒なの？』
携帯の向こうから井上の元気な声が望の耳に帰って来た。『うん、今練習終わったトコ。飯田先輩には話しておくから、すぐに行けるよ。場所は何処？』
「〇〇寺通りなんだけど。」
『うん！判った。』
望は携帯を切った。そして、綾を振り返り、
「これから来るってさ、あの寺に。」
「もしかして」
綾は目を細めた。「飯田先輩も一緒なのか？」
「・・・　・・・やっぱイヤ？」
「新婚家庭じゃないんだぞ。」
綾は冷たく言い放つと、元来た道を待ち合わせの場所に向かって戻り始めた。

参―1（後書き）

一応、プロットは経ちました。ミスドが食べたい海斗です。秋太りの最中です（｜｜）。。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2507o/

隠人使い　２　呪われし者＜４＞

2010年10月11日14時57分発行